



私の愛する一冊

荒このみ

夏目漱石 『それから』

アンケートの題名を変えて、「私がことし愛したい一冊」にして夏目漱石の『それから』をあげてみよう。『こころ』でも何でもいいのだけれど。主人公代助の高等遊民の暮らしにあこがれを抱きながら。代助は独り者なのに炊事いっばんをするばあやがいるばかりでなく、電話に出たり手紙を運んできたりする書生までいる。父親と兄に経済はすっかり世話になっているのに、自分はのんきに観劇などに出かけて行く。口は達者だけれど、時と場合に応じて無口になつたり、のらりくらりと自然に困難をかわしてしまう。結びの「ちよつと職業」を探していくところなど高等遊民術の最たるものだ。その高等遊民的暮らしをうらやましく思いながら、まじめ族にはできないこともわかつている。代助のような高等遊民になるには高度の「芸術性」が必要なのだ。高等遊民術がまだ私にはない。ああ。

岩崎務

ホメロス 『イリアス』

年齢を重ねるにつれてこの古典の味わい深さをいつそう感じるようになってきた。筋そのものは非常に単純で、大半は戦闘場面の描写であり、意外性に富み興奮に満ちた物語というのではない。しかし、同様な描写の繰り返しと思われるものが、次第にこちらの心に深くしみ入ってくる。そこに示されるのは、人間は死すべき限られた存在であり、苦しみを宿命として生きるということ。しかしホメロスは、そのことに全く絶望するのではなく、また、空しい希望を抱かせるのである。運命を懸命に生きる人物たちを、叙事詩人として一切の説明を加えずに描き出す。そして戦場という極限状況を表現するのに、対照的な日常の人間たちの生活や自然による比喩をしばしば織りまぜて独特の効果をあげながら、人間の生の本質を直接に伝える。人間の生と、そしてとりわけ死が見えにくくなっている現代において、この詩にときに触れることは、益々貴重な、勇気づけられる経験である。

上田玲子

牛島信男

岡田知子

梅棹忠夫 『文明の生態史観』

ファン・ルイス 『よき愛の書』

遠藤周作 『沈黙』

この本は、私が大学一年のときに先輩に勧められて読んだ本である。

かつて生態学者でその後人類学者として研究を続けた著者による比較文明論である。「機能論」とは何か、「進化史観と生態史観」「西洋と東洋」「東南アジア」など、著者のアジア一帯へのフィールドワークによる具体的な事例を通してきちんと段階的に整理されていく。

初めて読んだときは、「東南アジアの寺院がピカピカなのは彼らにおいて生きていなければならぬからである」に感動したが、難しく何度も読み返した。レジュメも各章ごとにつくってみた。それでもわからないところがたくさんあったが、理論としての魅力と強さを感じた。学問的で高尚な本に出会った大学生らしい気分浸ったと同時に、この本の述べようとしているところがわかるようにならなければいけないと自分で勝手に決め、以来私を現在の道へと引き込んでいったきっかけとなった励ましの本である。

欧米に官能的放縦と物質的頹廢、アラブ（イスラム）に禁欲性と厳格な戒律といった、現在われわれが漠然と抱いているイメージは、中世のある時期、少なくともある国においては逆ではなかったか。ある国とは、アル・アンダルスと呼ばれた、コルドバを中心とするイスラム治下のスペインである。

こうした風土と伝統のもとに生まれた、愛にまつわる洒脱にして徹底した談義・艶議・笑議ともいべき物語詩が『よき愛の書』である。カトリックの司祭が作者であってみれば、「よき愛」とは神に仕える精神的な愛と思いきや、イスラムの熱風により桎梏は吹きとばされる。そしてオウイ・デイウスの『愛の技法』をはじめとする、東西のもろもろの愛の手練手管が、アイロニーとユーモアを介して披露されるのである。

まさにキリスト教徒、イスラム教徒、ユダヤ教徒が共存しながら葛藤していた、スペイン中世のみが産出した愛の奇書である。

高校生の時に叔父の書齋にあったのをたまたま読んだのが最初で最後、それから一度も通して読んだことはない。切支丹に対する拷問の描写が恐ろしく、活字ですら見たくないのだ。ただ、折に触れて思い出し、拾い読みするのが「あの人」の「踏むがいい。お前の足の痛さをこの私が一番よく知っている」という言葉である。日常生活では「あの人」の存在感すら薄れ、滅多に感じることはない「沈黙」であるが、ふと自分自身がだんまりをきめこんでいることに気がつく。著者が洗礼を受けたという夙川教会の近くに

住み、午後零時にはアヴェ・マリアの鐘の響きを聞いていた高校生の頃の自分は、まだまだ「あの人」の「沈黙」を感じようとしていたのかもしれない。ペンでクメール語のミサに出た時の何ともいえない違和感を、江戸時代に生きた人も初めは感じ、それでもなお切支丹になり命を落していったことを思うと、敬服せずにはいられない。

岡村多希子

幸田文 『おとつと』

こころ惹かれる一冊です。なんといつても文章がうつくしい。リズムと、とりわけ前半部にはスピード感がある。著者特有のオノマトペが豊富につかわれていて、それがまた内容に実にしっくり合っている。主人公はげんとその弟の碧郎。中学にあがったばかりの十四歳から二十歳で結核のために病死するまでの碧郎の六年間を三歳年長の姉の目をおして語った自伝小説である。露伴という高名な父をもちながら、姉弟の家庭はさみしい。そのさみしさに負けてだんだん追いつめられてゆく弱々しくかばそい弟のあわれさ、ぎくしゃくした家庭であればこそいつそう強まる姉の弟へのおもいが、情緒ゆたかに、平易な歯切れのよいことばづかいで、あますところなく描かれる。作者は、一家の労働力としてしか父から評価されないげんの情けなさへの目くばりも忘れぬ。今回あらためて読んでみて、碧郎が私の次男とオーバーラップして仕方なかったのは、そのへなちよこぶりがよく似ているせいかもしれません。

奥平龍二

会田雄次 『アーロン収容所』

本書はいわゆる愛読書とは言えないが、著者と面識があつた私が去る9月他界された著者を偲んで感慨深く読み直した書物である。これは、会田さんがビルマ（ミャンマー）で終戦を迎えた後、1年9ヶ月過ごした英軍捕虜収容所での体験を赤裸々に描いた不朽の名作である。本書は、会田さんが収容所で目の当たりにした西欧人の冷酷なまでの人種差別と傲慢とさえ思える特権意識を、歴史家としての冷静でさめた観察及び評論家としての直言と厳しい批評によつて暴露し、西欧ヒューマニズムの限界を鋭く洞察したものである。他方、人を皮肉つた後に見せる会田さんの人なつっこさ、やさしい眼差しには人間味が溢れ親しみが湧く。日・英の戦場と化し、甚大な被害を被つたビルマを26年ぶりに訪れた印象を記した本書の姉妹編たる『アーロン収容所再訪』（文芸春秋社、1975年）の中で会田さんがふれているビルマ人への温かい思いやりは、そのことを如実に物語っている。

ウィリアム・フォークナー

『野生の棕櫚』

加藤雄二

偏愛するとしたらこの作品。「悲しみと無の間にあつて私は悲しみをえらばう」という美しい結びの言葉で知られてきた。芸術家でもある人妻との逃避行の末に、墮胎手術の失敗によつて愛人を殺してしまう貧乏なインタン、ハリー。この俗っぽいメロドラマが時に壮絶な美しさを見せるのは、おそらくハリーと愛人シャーロットの理屈としては馬鹿げた苦悩がアメリカ南部と合衆国、モダニズムの時代における男性・女性などの葛藤をはらむからというだけではなく、「人間の死を信じない」と語つたフォークナーが、『武器よさらば』のヘミングウェイを意識しつつ「愛」の成立しえない時代の愛の可能性とその汚れに果敢に挑み、その試みを楽しんでもいるからだろう。文章は清冽。「愛」の思想の馬鹿馬鹿しさも含めて、様々な意味で悲しみに満ちた一冊。この悲しさと馬鹿馬鹿しさのあいだの揺れは、様々な意味でわたしたちの日常そのものではないだろうか。

亀山郁夫

ドストエフスキー『悪霊』

ドストエフスキーの小説から一つ挙げよ、と言われたら、迷わずこの『悪霊』を選ぶ。学園闘争の時期にこれを読むという行為は、ある意味で「裏切り」を意味した。何といつても、同時代のロシアの革命運動を断罪した小説なのだ。小説は失敗に終わった。だが、「魂から取りだした」主人公スタヴローギンが作家を救った。心優しい悪魔スタヴローギンの語源にはギリシャ語の「十字架」が見え隠れする。何も知らない大学生の僕は、憐憫がなぜ悪なのかを、彼の「告白」をとおして知った。「告白」はまさに魂のミステリア。小林秀雄は『悪霊』論の完成に失敗した。ポーランドの二人のアンジェイ、ワイダ（『悪霊』）とズワウスキ（『私生活のない女』）を見比べるのも面白い。ヴィスコンティの失敗作『地獄に堕ちた勇者ども』には、ナチス時代のスタヴローギンが登場する。そして、今ぼくが失敗を恐れずに書いてみたい、と夢見ているテーマがある。それはカリスマ論。

川口健一

長塚節『土』

長塚節（1878-1915）の『土』を私は愛読書のひとつにしている。この作品は1910年（明治43年）に東京朝日新聞に連載された。当初の予定回数を大幅に越えて連載が続き、今日に残る長篇小説になったことが夏目漱石の『土』に就て」という文章から知れる。

『土』は茨城県結城郡の鬼怒川べりの農村を舞台に、明治40年代初めの小作農一家の暮らしと四季折々の農村の自然を描いている。

私がこの小説を読んだのは大学生になってからであった。鬼怒川から余り遠くない農村に生まれた私は、『土』から60年ほどの時間の隔たりはあるものの、この小説がつくり出している生活空間、そこを流れる時間に同じ風土に生きる人間としての同質感と愛着を覚えて引きずり込まれたのであった。農民と農村の自然をこれほど感動的に描いた作品を私は他に知らない。

川辺光

R・N・ベラー『日本近代化と宗教論』

周知の如く、著者は本書でウェーバー、パースンズ等の社会学理論を、日本の近代化に適用し、日本の近代化を理解するために大きく貢献した。著者の論考は、思想とりわけ宗教思想が社会的行為に影響するというウェーバーの視座を下敷にしている。かつて東洋諸国では未知であった西洋近代資本主義をもたらした合理的イデオロギーを促したとして武士と武士道に言及している。武士の宗教、禅宗と武士道倫理、この両者の結合が西洋プロテスタント倫理と類似を生みだしていると示唆しているのである。東洋諸国のなかで、なぜ日本だけが迅速に近代化することができたのか、先進産業国となりえたのか、またそれと同時に、スポーツ大国として台頭してきたのか、その推進力となった日本のエートス（精神）とは一体何であろうか。この古くて新しい問題は、「日本の近代化と日本のスポーツエートス」を研究テーマとする私にとって非常に興味のあることである。本書は精読に値する一冊である。

青木青児 『中華飲酒詩選』

沓掛良彦

やわらかくし、もつと寛闊な心を持っていだだきたいと冀うのみ。

筑摩書房叢書の一冊であるこの本を大学生協で見かけ、早速買ったのは確か大学四年の秋であったと記憶する。今奥付を見ると、初版一九六四年十月十日発行とあるから、それに間違いない。もつとも目下手許にあるのは、四冊目ぐらいであろう。しかしこれは韋編三絶してこうなつたわけではない。これまでの三冊は酔つ払つてあちこち置き忘れ、無くしたのである。人をしるごとく、漢土めでたく「詩酒合一」の境成つて、酒徒と詩徒を一身に兼ねた「詩酒徒」が輩出し、「以酒養真」の気概をもつて詩作にあつた国である。その禹域を代表する数々の飲酒詩の傑作に、迷陽道人青木正兒大人が、独自の味わい深い邦訳と精密な注釈を施したのが本書であつて、これを開きつつ酒甕を倒すのは何よりも楽しい。当節はやれガクモンだ、それ研究だギョウセキだと周囲がやかましく息苦しい。夫れ、風來山人平賀源内の曰く「味噌之味嗜臭キハ上味噌ニ非ズ。学者之学者臭キハ真ノ学者ニ非ズ」と。エライ先生方にも本書を親しんでいただき、詩文に遊んで固いアタマを



和田正平 『裸体人類学』

裸族からみた西欧文化』

栗田博之

人には絶対に薦めない一冊である。お勉強というのが大嫌いなので、仕事上どうしても必要なものを除けば、自らすすんで専門分野の本を手にするなどという馬鹿げた事はした事がない。この本も本来ならば買ってすぐに本棚直行となるはずのものであつた。しかし、某紙から書評の依頼があつたので、仕方なく精読する事にした。一読して驚いた。とても専門家の手になるものとは思えない程支離滅裂な本なのである。余りにもひどいので、頭に来て、徹底的にやつつけてやろうと、凝りに凝つた激辛の書評を書いた。読んで慌てた編集部が書き直しを依頼して来た。こちらも大人なので、長くなつても構わないという条件で素直に応じたが、激辛の部分はそのまま残しておいた。掲載見送りという事態も予想されたが、何とか無事掲載された。編集部とのやり取りも含め、この書評を書くことによって、私は異常なまでにハイな状態を保つ事が出来た。私がこの本を愛する所以である。

加治木義博 『落・奈落』

三枝壽勝

夏目漱石 『吾輩は猫である』

柴田勝二

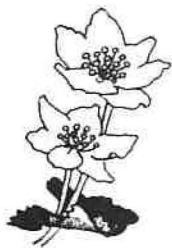
埴谷雄高 『死霊』

鈴木聡

愛の告白なんて芸能人みたいです。読ま
ずにでんでんでしてるだけの本だつて自分
じゃ愛されてるって思ってるかもね。うっ
かり公表なんかして妬いたりすねたりする
やつが現われてもかなわない。ということ
で見栄えもせず文句もでぬやつに登場して
もらつた。なれそめもパツとせぬ。日々の
糧を求めて走りまわっていた悪夢のような
時期、ふと立ち寄つたデパートで何か間違
いのようにして出会つた。夢みたいで著者
も題名もインキくさいが目の前にあるの
をみるとやっぱり本当だつたらしい。平和
を目指し活躍する主人公が却つて世界を戦
争に巻き込んでしまう話。ありとあらゆる
神様と魔物が総出演して大騒動。あげくの
果てに時間めがけて虚無の投げつけた反世
界のおかげで宇宙が消滅し破片となつた地
球が暗黒の奈落に落ちてゆくという荒唐無
稽なお話。すなわちラグナロク。冷戦まで
の現代史を寓意したハチャメチャパロディ。
たわいないが奇妙な印象がまだ残つてい
る。

この作品を初めて通読したのは小学六年
生の時だったが、それ以来漱石の作品のな
かではもつとも楽しいものとして繰り返し
読みつづけている。この作品の面白味の核
が、名前のない猫の一人称の設定であるこ
とはいうまでもないが、この猫の「吾輩」の
視点は次第に変容していき、初め一匹の猫
として登場し、他の猫たちとも交わりを
持つていた「吾輩」は、展開を追つてむし
ろ人間世界の様相を皮肉な眼差しで活写す
る叙述者へと移行していく。この「吾輩」
の、人間世界によつて疎外されながらそれ
を超越する眼差しは、おそらく作者のロン
ドンへの留学時に養われたものであろう。
一人の「無名」の東洋人として漱石は、文
字通り「猫」のように疎外されていたが、こ
ののけ者の感覚を自身の内に徹底させるこ
とで、漱石は自他を辛辣に相対化する作家
としての眼差しを持つことになった。この
作品を流れるユーモアもその捨て身の道化
から発している。

「私の愛する一冊」というテーマは、な
かなか書きにくいものなのですが、日
頃、重要な一冊と考え、なおかつじゅう
ぶん考察したり論じたりする機会のない
ものとして、埴谷雄高の『死霊』があり
ます。これと中井英夫の『虚無への供物』
を批評するということは、自らに課して
おきたい宿題です。



田中敏雄

谷川道子

アレクサンドル・ドーリン

トゥルスィーダース

ハイナー・ミュラー

『ラーマーヤンの湖』

『ハムレットブシーン』

Б.С.Ерпачов
『СОЦИАЛЬНАЯ КУЛЬТУРОЛОГИЯ』

「愛読書」ではないが、毎日、目を通さない
いと落ち着かない。それで1002頁のこの
書をばらばらにして、上着のポケットに
入れるようにしている。夜、目がさえて眠
れないときは、カセット・テープ。

「トゥルスィーダースはムガルの皇帝アク
バルより偉大であった」、「トゥルスィー
ダースの『ラーマーヤン』は、イギリスで
『聖書』が知られている以上に、北インドで
知られている」とか、ガンディーが『自

叙伝』で、「今日、私はトゥルスィーダース
の『ラーマーヤン』を絶対帰依の最高の書
と信じています」と語っていることが圧
力となっているのかもしれない。

毎日、目を通すようになったのは10年
前から。32年前、デリー大学でトゥル
スィー研究の権威から好きな詩句を聞いた
ことがある。その後、ある家庭で祖母から
聞いたという13歳の少年から、農村で農
民たちからその詩句を聞いた驚きを思い出
してのことである。

「私の愛する一冊」と問われると、やはり
今の私にはこの本を挙げさせてもらうしか
ないような気がする。現代演劇のパラダイ
ム・チェンジをうながしたドラマテクスト
として演劇史に残る作品になるであろうと
いうこともあるが、それ以上にこのテクス
トへの思い入れと、なにより著者のハイ
ナー・ミュラーへの「敬慕と哀悼の思いを
込めて」。

初出の『テアター・ホイテ』誌では三
頁弱、翻訳でも八頁という極小のこのテク
ストは、しかしブラックホールのようなエ
ネルギーの塊でもある。『ハムレット』を下
敷きにしつつ、だが一体これは何なのだ
という謎の塊で、それが一九九〇年に劇作家
や演出家、演劇評論家の方々と日本の演劇
現場の問題をも考える「HMP（ハムレッ
トマシーン・プロジェクト／ハイナー・
ミュラー・プロジェクト）」を結成する機縁
となった。

その私たちを何かにつけて暖かく支えて
くれたミュラー氏が逝って、はや二年にな
る。

イエランフ教授の研究は、文化論史上
初めて社会文化論の発展について、特別
の視点からの総合分析を提供する。著者
は非常に豊かな資料に基づいて、文化論
の次のような根本的な問題を取り上げて
いる。

・社会的文化論の研究手法・主要な流
派と学説 (L.Morgan, E.Taylor, G.Spenser,
E.Durkheim, M.Weber, R.Merton, S.Freud,
K.Jung, G.Plekhanov, V.Lenin, O.Spengler,
A.Toynbee, D.Bell et al.)
・社会的文化論の神話、宗教、社会思
想、芸術、科学

・文化を管理する社会機関の役割
・文化と社会の調整方法
・大衆文化とエリートの文化
・国際文化交流の発展と文化のグローバ
リゼーション過程

・社会の近代化と文化の移り変わり。
この本は二〇世紀の文化を研究する比較
文化論の専門家にとって不可欠の参考品
であると思われる。

中山和芳

田中一村 『田中一村作品集』

本を資料としてしか見なくなつてから久しいので、「愛する一冊」と言われると難しいが、とりあえず『田中一村作品集』を挙げておく。田中一村(1908-1977)は、生涯独身で、奄美大島で染色工をしながら島の自然を描いた日本画家。中央画壇に背を向け、無名のままひっそりと生涯を終えた。南国特有の草や木や鳥や魚を克明に大胆な構図で描いた。

原色の鮮やかな色彩で描き込まれていながら、不思議な程の静寂が画面から伝わってくる。アンリ・ルソーや伊藤若冲の絵から受ける印象に通ずるものがある。評伝に、小林輝幸『神を描いた男・田中一村』(1986 中央公論社)。

奴田原睦明

イブラヒム・コーニー

『失われたアーンヒー』

今私の脳裏を占めている一冊がある。実を言うとそれは「一冊」とは言いがたいもののだが、私の選んだものとして述べてみる。それはサハラ砂漠に伝わる、「アーンヒー」というもので、『失われたアーンヒー』として、トウアレグ族の作家イブラヒム・コーニーの作品の中に現われる。何故「失われた」なのかというと、初めからそれは書として書かれたことがなかったのだ。では全く失われてしまったのかというかと否である。目に見える形では存在しないが、トウアレグ族の人々の記憶の中に受け継がれているものなのだ。その内容は、サハラで生きていくために欠かせぬ先祖の体験や知恵の集積である。一例を挙げれば、「対立するものを持たぬものは正当ではない」などがある。砂漠で生きていくための指針としての役割を担った、目には見えないうが厳然と人々に意識の中に存在するもう一つの「書」をサハラで知った。

林和宏

西脇順三郎 『えてるにたす』

西脇の詩はどれも面白いが、「シムボルはさびしい／言葉はシムボルだ／言葉を使うと／能髄がシムボル色になって／永遠の方へかたむく／シムボルのない季節にもどろう」というきわめてアイロニカルな書き出しで始まるこの長編詩は、永遠をめぐって思考を歩ませながら、「何ものも象徴しない」ものを求めて言葉の野原をさまよう。「なにも象徴しないものもいい／つまらない存在に／無限の淋しさが／反映している／淋しさは永遠の／最後のシムボルだ／このシムボルも捨てたい」「永遠を象徴しようとしないうちに／初めて永遠が象徴される」ふだんベアトリーチェやラウラといった深遠なシムボルを相手に緊張を強いられる身にとつて、西脇一流の諧謔とのたまさかの出会いは得がたい安らぎである。「土のついた／タピラコの／にがい根を／かじりながら／逃走する／男」

藤井守男

ニーチェ 『善悪の彼岸』

「哲学的瞑想」などという縁遠い世界が、様々な解釈を可能とする世界であることを教えてくれた本、あるいは、哲学的著作が文学的感銘を与えるという実例として、大学に入学以来、折にふれ目を通す。道徳的判断の内に潜む非合理性を暴き、人間を、価値の捏造によって、ようやく、息を継いでいる「技巧的な不透明な生物」と突放すニーチェは、いわゆる「奇跡」についても、解釈の過失、文献学の欠陥とこきおろしているが、この本全体に散りばめられたメタフォールは、どこか、秘境的で、エマーソンの一節を思わせるような美しさは無類である。「真理が仮象より価値ありというのは、道徳的な偏見にすぎない」などという言葉は、ほとんど、神秘家の言葉を想起させる。文字通り、すべての思想は逃避所であり、すべての言葉は仮面である、ということか。「如何に語るか」、「如何に問うか」、「何を語るか」と等号で結ばれる幸福な著作ともいえる。

松浦寿夫

矢内原伊作 『ジャコメッティとともに』

あたりまえのことだが、一冊の書物を選択するに際して、さまざまな基準を考えてみる事が可能であり、また、個々の基準に応じて選択する書物も変化しうるだろう。それゆえ、ここで他の可能な書物を取りあげてみることも可能であり、少からぬとまどいもあつたが、『ジャコメッティとともに』の筑摩書房判を選択することにした。たえざる敗北を賭け金としてくり上げられる制作の過程で、稀有な戦利品のような美しい作品を獲得していくジャコメッティの、こういつてよければ「英雄的」な姿勢が、この書物の刊行された時代の多くの画学生たちにとつて、きわめて強烈な刻印を残したはずだが、単にそういつた教育的な効果にとどまらず、近代芸術がなにか記述しがたい不可能性に接触していることをあからさまに示してみせるという点で、この著作はいまなお再読に開かれた書物であり続けている。

真鍋求

『モノとしての「脳」』

これは分子生物学の立場から脳神経科学にアプローチした一般向けの解説書である。第二次世界大戦の戦火の中、自宅寢室の実験室で研究を続けながら、分子生神経生物学にブレイクスルーをもたらす神経成長因子の発見者となつたレビー・モルタルチーニ女史のエピソードを出発点として、分子生物学が神経研究において確固たる立場を築くに至つた歴史がコンパクトにまとめられている。また神経細胞のプログラム死アポトーシスが紹介されている。これは神経細胞がDNAのプロセスに沿って積極的に消滅することによって、脳全体として機能を維持するという逆説的な現象である。神経細胞はマクロ的には再生分裂が起きないリッジットな構造物であるが、分子レベルの世界ではアメンバーのごとく時事刻々変化している様を想像させる。

水林章

ジャン・スタロバンスキー

『ルソー、透明と障害』

大学4年生の春であったと思う。新宿の紀伊国屋書店4階の洋書売場で、文学テクストへの新しいアプローチを知ろうえで必読の書と言われていたスタロバンスキーのこの著作をたまたま見つけ、本の分厚い感触と裏表紙に記された内容紹介のテクストに誘われるまま購入した。そして、この本

をわたしは一年後の夏休みに留学先のモンペリエで、ほとんど恍惚とした気分を味わいながら読んだ。直前に読み終えたジャン・ピエール・リシャールの『スタンダールとフローベール』の素晴らしさにも圧倒されていたが、すでに18世紀の勉強にとりかかっていたわたしには、スタロバンスキーとの出会いは決定的であった。森有正の作品群に抗しがたい魅力を感じてフランス語を熱心に勉強し始めたという事情があるにせよ、あのときあの本を買っていなかったら、自分はフランス語の教師になっていただろうか、と思うほどである。スタロバンスキーの批評・研究は、あらかじめ存在する「方法」によって対象を暴力的に

搦め取ろうとする独断的な態度とは無縁である。そこには対象への限らない共感が息づいていると同時に、対象との同一化の過程をへて設定される好ましい距離に根ざした、対象について語りながらしかも決して対象を破壊することのない希有な言葉が散りばめられている。それはわたしたちの誰もが学ぶべき「他者」に対するこのうえなく美しい態度であるように、わたしには思われるのである。

村尾誠一

ヨハン・ホイジンガ 『中世の秋』

今から振り返っても気恥ずかしいぐらいに、素朴に感傷的であった青年期のはじめにこの本に出会った。いうまでもなく、オランダの歴史家によるブルゴーニュの十四・五世紀論であるが、内容はともかくも、先ずは序文に示されたイメージ、そして言葉の断片が、私を魅了した。「中世文化は、このとき、その生涯の最後の時を生き、あたかも咲き終わり、ひらききった木のごとく、たわわに実をみのらせた。」あるいは「この書物を書いていたとき、視線はあたかも夕暮れの空に吸いこまれていくかのようにであった。」など。私には、それはそのまま日本の王朝の黄昏、常に座右にあった『新古今和歌集』の夕暮の歌に結びつき、私の物学びを始めさせようとしていた。そして、今でも、初心を見失いそうになるとき、時々振り返る書物として、常に書棚の特別な位置を占めているのである。

八木久美子

渡邊雅司

Robert Mottahedeh

『The Mantle of the Prophet』

ロバート・モッタヘデというイラン系のアメリカ人の歴史学者が書いたイラン・イスラム革命前後のイランの状況を史実に基づきつつ、また実在の人物をモデルにしつつ、物語風に書いたものです。私はイランを専門とはしていませんので、モッタヘデ氏が示す解釈や認識がどの程度鋭いものであるか、あるいは客観的なものであるかというような判断はできませんが、イランであればいくらかでもいるようなムッラー（宗教諸学専門家）の卵や共産主義者の学生や、またそうした息子達の思想や主張は良く理解できないながらその安全や成功を祈る母親、そして苦悩の末に体制の側につくことを拒否していく将校など豊かな登場人物を登場させることによって、あの革命がいわゆるふつうの人々にとつてどのような経緯であったのかをいきいきと描き出しています。特にイランあるいはイスラム世界に興味があるわけではない人にとつても、単に物語としても十分に楽しめるものになっています。

トルストイ『戦争と平和』

童話以外ロシア文学を一冊読まずに、外語に入ってしまった私は、作家志望の文学青年たちと文学サークルを作り、週一冊のペースで読書会をしていた。そして夏休みには、トルストイとドストエフスキーの長編を読破することが課された。最初に読んだのが、『戦争と平和』だった。大判三段組で枕ほどの厚さのこの長編を読み切るのは、難業だった。数百人という登場人物の多さ、しかも愛称がやたらと出てくるので、一年生には人物の同定がむずかしかった。

それでもナポレオン戦争に題材を取ったこの作品のスケールの壮大さには圧倒された。とりわけアンドレイ公爵の高貴な精神とナターシャの純粋な愛には心打たれた。同じようにして『アンナ・カレニナ』も『復活』も読んだが、『戦争と平和』の持つ重層な構成は群を抜いていた。そして「アウステルリッツの青空」という四〇枚ほどの『戦争と平和』論を書いた。これが私の処女論文である。

